

国際的な視野で放射線災害復興を推進する人材を目指す

放射線災害予防に役立てるため、使命感を持って取り組めるプログラム



辻本 聖也
放射線環境保全コース

原子力・放射線災害の特徴は、災害の長期化および多様化にあります。行為の正当化から逸脱する被ばく、放射性物質による環境汚染とその廃棄物処理、被災

者の身体的・心理的ストレスなど問題が山積しています。そして、このような放射線災害に立ち向かえる人材を育成するために創生されたものが、私たちの「広島大学大学院放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム」です。

放射線災害医療・放射線環境保全・放射線社会復興の3つのコースがあり、各コースの学生がともに活動し、刺激しあうことで、専門的で幅広い見識を身に付けたリーダーを育成しています。

私は、入学前は(株)千代田テクノで放射線施設の遮蔽計算等を行い、社会が放射線を安全に利用できるような技術開発に携わってきました。プログラム修了後は、(株)千代田テクノにおいてプログラムで習得したスキルを生かして、“安全”な原子力・放射線防護の発展に貢献することで放射線災害復興を推進し、人が“安心”して生活できる国際社会を築くことが出来るグローバルリーダーを目指します。

プログラム担当者

■プログラム責任者: 神谷 研二 広島大学 副学長(復興支援・被ばく医療担当) ■プログラムコーディネーター: 小林 正夫 医歯薬保健学研究院

放射線災害医療コース

コースリーダー

松浦 伸也 原爆放射線医学研究所

- 粟井 和夫 医歯薬保健学研究院
- 岡本 哲治 医歯薬保健学研究院
- 茶山 一彰 医歯薬保健学研究院
- 宿南 知佐 医歯薬保健学研究院
- 菅井 基行 医歯薬保健学研究院
- 田中 純子 医歯薬保健学研究院
- 永田 靖 医歯薬保健学研究院
- 安井 弥 医歯薬保健学研究院
- 西尾 禎治 医歯薬保健学研究院
- 廣橋 伸之 医歯薬保健学研究院
- ディオン クリングウォール 医歯薬保健学研究院
- 東 幸仁 原爆放射線医学研究所
- 本田 浩章 原爆放射線医学研究所
- 稲葉 俊哉 原爆放射線医学研究所
- 瀧原 義宏 原爆放射線医学研究所
- 田代 聡 原爆放射線医学研究所
- 大津 留晶 福島県立医科大学
- 坂井 晃 福島県立医科大学
- 谷川 攻一 福島県立医科大学
- 安村 誠司 福島県立医科大学
- 細井 義夫 東北大学
- 高村 昇 長崎大学
- 島田 義也 国立研究開発法人放射線医学総合研究所
- 小笹 晃太郎 公益財団法人放射線影響研究所

放射線環境保全コース

コースリーダー

静岡 清 工学研究院

- 出口 博則 理学研究科
- 深澤 泰司 理学研究科
- 中島 覚 理学研究科
- 山本 卓 理学研究科
- 高橋 秀治 理学研究科
- 遠藤 暁 工学研究院
- 土田 孝 工学研究院
- 半井 健一郎 工学研究院
- 田中 憲一 工学研究院
- 奥田 敏統 総合科学研究科
- 山田 俊弘 総合科学研究科
- 加藤 範久 生物圏科学研究科
- 長沼 毅 生物圏科学研究科
- 渡邊 明 福島大学

放射線社会復興コース

コースリーダー

坂田 桐子 総合科学研究科

- 林 武広 教育学研究科
- 尾形 明子 教育学研究科
- 岩 永 誠 総合科学研究科
- 入野 宏 総合科学研究科
- 杉浦 義典 総合科学研究科
- 勝部 真人 文学研究科
- 三浦 正幸 文学研究科
- 中山 富廣 文学研究科
- 後藤 秀昭 文学研究科
- 後藤 弘志 文学研究科
- 戸田 常一 社会科学研究科
- 浦邊 幸夫 医歯薬保健学研究院
- 筒井 雄二 福島大学
- 本多 環 福島大学
- 原野 明子 福島大学
- 吉田 樹 福島大学

フェニックスアドバイザー

- RethyK.Chhem カンボジア開発資源研究所(CDRI)所長、広島大学客員教授
- MayAbdel-Wahab 国際原子力機関(IAEA)保健部長、広島大学客員教授
- GordonH.Sato 米国科学アカデミー会員、A&G製薬取締役会長、マンザナル・プロジェクト代表
- 土肥 博雄 日本赤十字社中四国ブロック血液センター所長、広島赤十字・原爆病院名誉院長、広島大学客員教授
- 及川 友好 南相馬市立総合病院副院長、広島大学客員教授

※平成27年9月時点

編集後記

じりじりと太陽が照りつける季節が終わり、秋の足音を感じる日々、10月からは4期生を迎え、ますます活発なプログラムを目指します。



Phoenix Letter

- Phoenix Letter Vol.5
- 編集・発行: フェニックスリーダー育成プログラム事務局
- 住所: 〒739-8524 東広島市鏡山1-1-1 教育学研究科B棟810号
- TEL: 082-424-4689
- E-mail: phoenix-program@office.hiroshima-u.ac.jp
- Web: http://www.hiroshima-u.ac.jp/lp/program/ra/



広島大学

- 博士課程教育リーディングプログラム
- 放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム

Phoenix Letter

Vol.5 Oct. 2015

Contents ▶ Course Leader's Voice...P.1 Current Activity Report...P.2~P.3 Student's Voice and Program Member...P.4

広島大学大学院に設置された「放射線災害復興を推進するフェニックスリーダー育成プログラム」は、平成23年度文部科学省「博士課程教育リーディングプログラム」に採択された大型教育プログラムです。放射線災害復興学は世界的にも緊急の課題とされる学問領域であり、広島大学は世界的にその先駆けとなります。



Course Leader's Voice

坂田 桐子 教授

放射線社会復興コース コースリーダー

今回は、放射線社会復興コースのリーダー坂田桐子先生に登場していただきます。

放射線災害復興の推進のために、どのようなリーダーが求められているのでしょうか。

一般的に“リーダー”“リーダーシップ”というと、グループなどの先頭に立ちくぐぐいと集団を引っ張っていく姿をイメージしがちだと思います。確かにリーダーが先頭に立ち旗を振り、一つの方向に向かって活動を推し進めることが復興にとって重要な場面もあると思いますが、私はそれ以外のリーダーが必要であると考えています。その理由は、放射線災害復興と一言で言っても様々な活動があり、多様化した問題が内包されているからです。そして、このように多様化した問題に対する復興には、復興に関わる様々な立場・分野の人々が主体的に活動出来るようにエンパワーし、コミュニケーションを活性化させ、ネットワークの輪を拡大するための援助が出来るリーダー、いうなれば、支援型・奉仕型のリーダーが求められていると思います。

本プログラムで学ぶことにより放射線災害復興にどう貢献できるのでしょうか？

放射線災害復興の問題点は、被災された方々の立場や状況が非常に多様化していることだと思います。このような多様化した問題に、一人や二人の専門家が対応し、全ての状況や問題点を把握することは困難です。仮に多くの情報を収集蓄積しても、学際的知識基盤が無いと、どの情報が問題解決にとって重要であるかを取捨選択することが出来ず、重要な情報を切り

捨ててしまう可能性があります。

本プログラムでは、放射線医療の知識、放射線が環境に与える影響、そして、人の心理などについて広く学ぶことが出来る一方、実際に被災地に行って、そこで生じている諸問題を知る機会にも恵まれています。このような環境で学ぶからこそ、膨大な情報の中から、重要な情報に反応できるアンテナを築くことが出来ると思います。

そして、学修した分野横断的知識を基礎として、様々な分野の専門家とコミュニケーションすることにより、新しいアイデア・発想を生み出して放射線災害復興に貢献してくれると信じています。

本プログラム在学学生ならびに本プログラムを志望する学生へメッセージをお願いします。

プログラムもスタートから4年が経過し、プログラム自体もこれまでの活動などを見直すことによって成熟してきていますし、分野・年齢・国籍を超えた切磋琢磨できる環境のなかで、プログラム学生の間でも「グローバルリーダーが育成される風土」が作られて来ていると実感しています。

このような風土の中で、在学学生はこれまで以上に勉学に励み、お互いに刺激しあえる、複雑で多様化した問題に対処できるセンスを身につけてほしいと思います。また、プログラム入学に対して興味のある方は、多くの刺激を受け取る事の出来るこの場所に身を置き、放射線災害復興のリーダーと一緒に目指してほしいと思います。

4月～	セメスター開始
(3月1日)～ 6月30日	長期インターンシップ派遣 ・IAEA (1名)
4月16日～30日 4月17日～30日	短期インターンシップ派遣 ・IAEA (2名)
4月27日	共通コースワーク報告会開催 短期インターンシップ報告会開催
5月11日・12日	平成27年度入学生第二次募集 入試説明会開催 11日 東広島キャンパス 12日 霞キャンパス
5月19日	平成27年度第1回 フェニックスリーダーシップセミナー開催
5月27日	フェニックスリーダー育成プログラム 学生フォーラム ・ICRR2015
5月28日	フェニックスリーダー育成プログラム シンポジウム ・ICRR2015
6月11日	平成27年度第1回フェニックスリーダー 育成プログラムセミナー開催
6月22日	平成27年度第2回フェニックスリーダー 育成プログラムセミナー開催
6月25日	平成27年度第3回フェニックスリーダー 育成プログラムセミナー開催
7月6日	平成27年度第1回 インターンシップ報告会開催
7月1日～2日	第3回グローバルフィールドビジット実施
7月10日～11日	第5回リトリート開催
7月13日	平成27年度第4回、第5回フェニックス リーダー育成プログラムセミナー開催
8月11日～21日	オークリッジ科学研究所放射線緊急時 支援センター (REAC/TS) トレーニング参加
8月17日～28日	短期インターンシップ派遣 ・IAEA (1名)
8月31日～9月4日	短期フィールドワーク実施
9月22日～24日	第4回グローバルフィールドビジット実施

4月27日 共通コースワーク報告会開催 短期インターンシップ報告会開催

「共通コースワーク」とは、本プログラム所属学生が1年生～2年生の間に履修する5科目の実習や演習を含む必修授業科目群であり、本報告会は、学生が、この共通コースワークで学習した分野横断的知識をもとに、与えられた課題に対して口頭発表を行う学修機会であり、学生が5分の口頭発表及び質疑応答を行い、プログラム担当者が学生の学習状況等を確認しました。

また、短期インターンシップ報告会では、広島市公文書館で行った短期インターンシップにおける学修内容が報告されました。

両報告会では、学生の分野横断的学習や実践力学習の成果を確認することが出来ました。



5月19日 第1回フェニックス リーダーシップセミナー開催

公益財団法人マツダ財団常務理事・事務局長の魚谷滋己氏を招いて「グローバルビジネスに求められる力」と題して、当プログラム所属学生16名、今年度入学予定者(研究生)2名、リーディングプログラム「たおやかプログラム」から1名、その他教職員11名の計30名が参加しました。

海外事業所で長く勤務し、異なる国籍・背景・文化をもつ社員からなる組織の管理者としてチームを率いてこられた講師の経験から、国際的なビジネスの現場におけるリーダーシップをテーマに講演していただきました。

セミナーでは課題についてのディスカッションも行われ、学生たちは上司や部下の立場に自分を置いて、新たに雇用する部下やリーダーに必要な資質等についてそれぞれの意見を述べ、活発な意見交換を行いました。参加者からは「産業界の

状況について考える機会が得られて有意義だった」等の感想が寄せられました。



7月1日～2日 第3回 グローバルフィールドビジット実施

1日午前、福島県立医科大学放射線災害医療センターで実施された緊急被ばく医療実習に参加し、緊急処置を学習するとともに、放射線被ばく患者発生時を想定したサーベイ・除染・治療の実習を行いました。また、午後には、福島県立医科大学-IAEA 共催の「放射線災害医療とSTSに関するワークショップ」に参加しました。



2日は、東京電力福島第一原子力発電所構内で、緊急医療室、構内に設置された汚染水貯蔵タンク、4号建屋、多核種除去設備などについてバス車内から見学し、福島第二原発では、海水熱交換機建屋内の冷却系装置の津波被害状況、4号機



建屋内では、使用済み燃料プールオペレーティングフロアや原子炉格納容器内の見学を行いました。

学生からは、「今なお多くの困難の中で復興・復旧を行っている福島原子力発電所を見学する貴重な経験によって、復興には多角的なアプローチが不可欠であり、分野横断的学習に一層励みたい」といったコメントがあり、参加者にとって非常に充実した機会となりました。

7月10日～11日 第5回リトリートを開催

プログラム学生、教職員及び招聘講師の合計43名が参加して、寝食を共にしながら、学際的な広い視野でこれまでの学修の成果及び今後の課題を確認する第5回リトリート(テーマ「グローバルな情報社会に向けて」)を開催しました。

小林正夫プログラムコーディネーターから開会挨拶があり、その後学生の活動報告並びに研究内容の発表がありました。



2日目には、文部科学省科学技術・学術政策局次長岸本康夫氏から「第5期科学技術基本計画に向けた今後の科学技術イノベーション政策と人材育成」と題して講演が行われ、学生はもとより教職員にとっても非常に重要な学習機会となりました。その後、プログラム担当者のDion Clingwall特任准教授、吉本由紀特任助教の研究紹介があり、第4回目の学生・教員意見交換会を開催し、関連な意見交換を行いました。

8月31日～9月4日 短期フィールドワーク実施

今回の短期フィールドワークでは、分野横断的な視点から放射線災害を学び、現地の人々と接することで、視野が大きく広がったと感じています。特に、飯館村立草野・飯樋・白石小学校や友伸グランド仮設住宅訪問では、そこで生活する方々から震災当時の経験や現在の心配事などを伺い、机上では受けることができない経験ができました。



このことから、人間同士の交流ややり取りが加わっている学びの場が一番心に響くと実感し、今後の研究の場でも、人とのつながりを大切にしていきたいと思いました。

(放射能社会復興コース1年 松本千香)

9月22日～24日 第4回 グローバルフィールドビジット実施

学生3名が、ベラルーシ南部のホメリ州にあるthe Research Institute of Radiology (RIR) で行われたトレーニングコースに参加しました。このコースは「Late phase nuclear accident preparedness and management」と題して、フランス放射線防護評価センター (Nuclear Protection Evaluation Center; CEPN) とRIRの運営により行われました。

講義では主に欧州の原子力災害後の対応の原則や、汚染された食物や水の管理および内部被ばくの予防の実践を学びました。また、チェルノブイリ原子力発電所事故後、放射線量が高く住民が移住を余儀なくされた地区の見学を行いました。そこでは、事故から29年が経過した現在でも、医療機関や教育機関で住民の内部被ばくを防ぐための検査や教育が行われている現状を知り、原子力災害の影響が長期化することを学びました。



福島第一原子力発電所事故と同様に、国際原子力評価事象尺度で最も深刻な「レベル7」に相当するチェルノブイリ原子力発電所事故の事例から、原子力災害後の対応についてより見識を深める機会となりました。

(放射能社会復興コース3年 森山信彰)